

〔結果〕 移動能力の発達では、始歩のレベルでは、平均 20 カ月で正常の 1.4 倍で、手の使用の発達では、積木を 3 個つむという 15 カ月のレベルでは、17.8 カ月と 1.2 倍で、またことばの発達では、始語 11 カ月のレベルでは、16.6 カ月と 1.5 倍の期間で通過しており、対照群とは、いずれも著しい差異を示し、早期療育の効果を示した。

〈追加〉足立学園 高松 鶴吉：私達運動発達障害児に対してリハビリテーションを実施しているチームは、発達障害児全体の発達に対してもっと関心をもちたいものと思う。厳密な意味では、単に発達のスピードがましても、いずれ到達するプラトーは同一かも知れず、このような治療の成果についての考証は長期のフォローを必要とすると思うが、現時点では有効であると考えられる。

〈質問〉横浜市立大学リハ科 間嶋 満：母親指導の項目について。

〈答〉安藤 忠：母親指導の内容は、①健康管理、②栄養指導、③生活指導（生活のめりはりをつけて起きている状態、眠っている状態の感じをはっきりさせることなど）、④家庭内での所属をはっきりさせること、⑤母親同志仲よくすること、などです。テキストとしては（障害幼児指導の手引）を、家庭内学習として教えています。

## II・3-23. 胎動胎位と運動発達の関係について

長崎日赤原爆病院 岡本 義久  
長崎大学整形外科 穂山富太郎 鈴木 良平  
長崎県立整肢療育園 川口 幸義

我々は日常の外來診療および保健所にて、運動発達障害および先天性変形性疾患を早期発見治療するため、経時的な発達検診を行ってきたが、運動発達はすでに胎内で始まっており、それが母親に胎動として、自覚される。この胎動の強さ、出現時期を調べることによって、疾患の早期発見や予防、原因の究明に役立つかどうか、検討した。

まず正常児 120 名について調べ、初期の小さな胎動は平均 5.0 カ月に出現し、大きな子宮を跳るような胎動は平均 7.4 カ月に出現し、胎動の特に弱いもの 6%、大きな胎動を感じなかったもの 5% であった。これを他の種

種の障害をもった乳幼児の胎動と比較し、その疾患の子宮内発達の状態をさぐった。

①ダウン症児は小さな胎動は 0.8 カ月、大きな胎動は 31.5% にみられず、残りの平均でも 1 カ月の遅れを示した。

②精薄児では、小さな胎動は 0.7 カ月、大きな胎動は 23% にみられず、残りの平均でも、0.9 カ月の遅れを示した。

③脳性麻痺児では、小さな胎動は正常と差はほとんどなく、大きな胎動を感じなかった者も正常と同じであったが、大きな胎動は 0.6 カ月遅れ、胎動が弱いと感じたのは 14% であった。

④先股脱は、妊娠末期の胎動を弱く感じたものが 23% にあったほかは正常と差はなかった。

⑤胎性斜児は大きな胎動を感じなかったものが 40% にあった。

首のすわり、坐位、歩行等が、乳幼児の運動発達の指導となるように、胎動は胎児の子宮は運動発達の指標となり得る。

胎動が活発で、分娩時にも何のトラブルもないにもかかわらず、しだいに活動性が減弱する時、クレチン症や先天性代謝障害を疑ってみる必要がある。また、胎動の発現時期が遅く、弱い時、胎内性発育障害の可能性があり、先股脱や筋性斜頸の成因を論ずる上での一つの手がかりとなる可能性がある。

## 歩行分析

座長 月が瀬リハビリテーションセンター  
齋藤 正也  
長崎大学整形外科 鈴木 良平

II・4-1~10

### II・4-1. 歩行分析——正常歩行について

関東通信病院 竹広 舜 赤司富紗雄  
貞光 俊二 高城 孝彦 河井 弘次  
東京大学整形外科 望月 直哉 中島雅之輔  
津山 直一

歩行時の三方向の分力とモーメントの測定を行う床反力計、ワイアレスレメータによる 6 カ所からの筋活動

#### 1) Analysis of Gait—Normal Walking.

S. Takehiro, F. Akashi, S. Sadamitsu, Y. Takagi, K. Kawai : Kanto-Teishin Hospital.  
N. Mochizuki, M. Nakazima, N. Tsuyama : Department of Orthopaedic Surgery, Faculty of Medicine Tokyo University.

#### 23) Relation between Fetal Movement and Motor Development.

Y. Okamoto : Nagasaki Red Cross Hospital.  
T. Akiyama, R. Suzuki : Department of Orthopaedic Surgery, Nagasaki University School of Medicine.  
Y. Kawaguchi : Nagasaki Prefectural Seishi Ryoikuen.